

岐阜県仏教会 25 年度本めぐりの旅 (25 年 6 月 24 日)

東大寺大仏殿 (毘盧遮那仏)

大仏造立の詔の 2 年前の天平 13 年 (741 年)、聖武天皇は、国ごとに国分寺と国分尼寺を造ることを命じた。そして、東大寺は大和国の国分寺であると共に、日本の総国分寺と位置付けられた。この国分寺造立の



思想的背景には護国經典である「金光明最勝王經」の信仰があった。同經によれば、この經を信じる国王の下には、仏教の護法善神である四天王が現れ、国を護るといふ。聖武天皇は、日本の隅々にまで国分寺を建て、釈迦像を安置し、金光明最勝王經を安置することによって、国家の安定を図ろうとする意図があったものと思われる。

東大寺ミュージアムに展示してある、西大門勅額 (奈良時代 8 世紀 かつての正門) の額面には、聖武天皇宸筆と伝わる「金光明四天王護国之寺」の文字を刻む。額面の周囲には、鎌倉時代の作の八天王 (梵天・帝釈天・四天王・金剛力士) を配し、東大寺の正門にふさわしい風格を備え、護国の思想を伝えている。創建当時の大仏と大仏殿の建造費は現在の価格にすると約 4657 億円と算出されている。

『華嚴經』は、大乘仏教の經典のひとつで、大方広仏、つまり時間も空間も超越した絶対的な存在としての仏という存在について説いた經典である。華嚴の原義は「花で飾られた広大な教え」という意味になる。この經典は釈迦の悟りの内容を示しているといい、「ヴァイローチャナ・ブツダ」という仏が本尊として示し、意味は「太陽の輝きの仏」と訳し、「毘盧舍那仏」と音写される。陽光である毘盧舍那仏の智慧の光は、すべての衆生を照らして衆生は光に満ち、同時に毘盧舍那仏の宇宙は衆生で満たされているという。これを「一即一切・一切即一」とあらわし、「あらゆるものは無縁の関係性(縁)によって成り立っている」これを法界縁起と呼ぶ。



聖武天皇が位に付いていた 8 世紀前半、すなわち天平時代の日本は決して安定した状況ではなかった。天平 9 年 (737 年) には、天然痘 (疫病) が猛威をふるい、そのほかにも、天平時代は例年早魃・飢饉が続き、天平 6 年 (734 年) には大地震で大きな被害があり、国分寺建立の詔の出る前年には、九州で内乱が発生するなど、社会不安にさらされた時代であった。よって、聖武天皇は、こうした社会不安を取り除き、国を安定させたいという願いが背景にあり、国分寺の建立、東大寺大仏の造立に至ったものと推測される。



(東大寺ミュージアム 見学 国宝 東大寺金堂鎮壇具のすべて)

国宝東大寺金堂鎮壇具は、明治 40 年~41 年に大仏さまの須弥壇の周囲から発見・発掘されました。また、平成 22 年秋に「陽剣」「陰剣」

の象嵌銘が発見された大刀2口を含む、国宝東大寺金堂鎮壇具の保存修理が完成し、記念特別展にて一括公開されていました。

『国家珍宝帳』所載の金銀荘大刀2口、また鞘に繊細な金平脱唐草文様がほどこされた金釧荘大刀2口、鞘に含綬鳥文を表した金釧荘大刀1口、刀身に北斗七星の象嵌がある銀荘大刀1口をはじめ、鉄製の小札を組紐でつづった挂甲残闕、金泥文様のある漆皮箱残欠、銀製狩獵文小壺など、多種多様の出土遺品が展示。

正倉院に残る『出蔵帳』の記載から、これらの出土遺品は、おそらく光明皇后（聖武天皇の后）により天平宝字3年（759）12月以降頃に埋納された宝物と考えられる。金堂鎮壇具とは、大仏殿創建の折、地神を祀るために須弥壇周辺に埋納された宝物。

東大寺は、釈尊の悟りの境地が説かれた「華嚴経」を所依の經典とし、その教えは①世界に存在するあらゆるものは、それぞれの密接な相関関係の上に成り立ち、互いに融合し調和を保ち、平和で秩序ある世界を形成している。②一つは全ての中に、全てを一つの中に観ることができます。③あらゆる事象は心が転じたものと観察し、形や時間にとらわれる事なく宇宙の真理を探究する努力を怠らない。④動植物をも含めたすべての生きとし生けるものの繁栄を願い、人々の苦しみを救済しようとする菩薩の行い実践し、互いの思いやりの心をつなげてゆく。と揭示されていた。

唐招提寺と鑑真和上

鑑真和上は688年に中国揚州で誕生、14歳の時、揚州の大雲寺で出家されました。21歳で長安實際寺の戒壇で弘景律師に授戒を受けたのち、揚州大明寺で広く戒律の講義し、長安・洛陽に並ぶ者のない律匠と称えられました。

733年聖武天皇の命を受けた興福寺の学僧であった美濃の僧栄叡と普照。戒律に詳しい中国の僧を招くために遣唐船で中国に渡り、苦節10年。743年やっと鑑真に巡り合う。熱心な招きに応じ渡日を決意されましたが、当時の航行は極めて困難、さらに国禁を犯しての渡航。鑑真和上は5度の失敗を重ね盲目の身となられました。しかし、和上の意志は堅く、753年12月、六度目の航海で遂に来朝を果たされました。



翌年和上は東大寺大仏殿の前に戒壇を築き、聖武天皇を初め400余人の僧俗に俗に戒を授けました。こ



これは日本初の正式授戒です。鑑真和上は東大寺で5年過ごされたのち、758年大和上の称号を賜りました。あわせて右京五条二坊の地新田部（にたべ）親王の旧宅地を賜わり、天平宝字3年（759）8月戒律の専修道を創建され、天平宝字7年（763年）5月、波乱の生涯を日本で閉じた。（数え年76歳）これが現在の律宗総本山唐招提寺。唐招提寺という寺号は、「唐僧鑑真和上のための寺」という意味合いである。

国宝 金堂は、奈良時代建立の寺院金堂としては現存唯一のものである。2000年から解体修理が行われ、2009年11月1日-3日に落慶

行事が行われた。講堂や鼓楼、校倉造りの宝蔵・経蔵等目るべき建物も多い。

芭蕉は、元禄元年（1688）4月8日ここで、鑑真和上坐像を拝した際に、「若葉して御目の雫拭はばや」（わかばして おんめの しづく むぐは ばや）句を詠んだ。芭蕉は、鑑真の見えない眼に、涙が出ているのを感じたのだろう。あまりにも深く、悲しい涙なのか？ せめて若葉で拭って差し上げたいという句である。開山堂の前にある。1688年は、和上生誕1000年の年であった。



井上靖は、和上の生涯を『天平の薨』と題した小説を書き、その名を世に広めました。まさに、天平の昔に思いを馳せることが出来る、いいお寺です。特に、岐阜県とは栄叡大師との関係により縁の深いお寺の一つです。

薬師寺と玄奘三蔵



薬師寺は、興福寺と共に「法相宗 [ほっそうしゅう]」の大本山です。天武天皇により発願（680）、持統天皇によって本尊開眼（697）、更に文武天皇の御代に至り、飛鳥の地において堂宇の完成を見ました。その後、平城遷都（710）に伴い現在地に移されたものです。（718）現在は平成10年よりユネスコ世界遺産に登録されています。

宗祖は中国唐代の慈恩大師（632～682）ですが、宗祖の師匠にあたるのが玄奘三蔵（600～664）です。そこで玄奘三蔵を始祖あるいは鼻祖として崇めています。古来より法相宗の寺院では宗祖慈恩大師を讃嘆する法会を慈恩会として11月13日に、同じく始祖玄奘三蔵を讃嘆する法会は三蔵会として2月5日に勤めてきました。

法相宗の教えは、玄奘三蔵が最も究めたかった唯識教学を根本経典としています。法相宗を日本に最初に伝えたのは、玄奘三蔵から直接に教えを受けて帰国した道昭菩薩（629～700）で、弟子に有名な行基菩薩がいます。道昭菩薩は薬師



寺で、持統天皇が天武天皇の供養のために織られた繡仏（しゅうぶつ）の開眼講師を勤めています。また西院伽藍には玄奘三蔵の御影像が安置されていました。そうしたことから見て薬師寺は玄奘三蔵と深い縁があります。



玄奘三蔵の頭のお骨（頂骨）が、昭和17年12月23日に、南京で日本兵によって発見されました。その分骨を全日本仏教会が受け、戦後に埼玉県岩槻市の慈恩寺の境内に記念碑が

建てられました。薬師寺は全日本仏教会より玄奘三蔵を顕彰するため分骨を拝受し玄奘三蔵院伽藍建立の発願をしました。そこに平山郁夫画伯との不思議な出会いを得て、大唐西域壁画が献納されることになりました。薬師寺は伽藍を建て、平山画伯は壁画を描いて共に施主となり、頂骨を真身舍利（しんじんしやり）とし、壁画を絵身舍利（えしんしやり）として祀る伽藍となりました。これはすべて玄奘三蔵のお計らいと受け止めていますと「玄奘三蔵院伽藍縁起」に書かれています。

お詣りして玄奘三蔵法師の『「不東」（ふとう）の精神』・インドにつくまで一歩も東に帰るまい・「もし天竺に至らざれば、ついに一歩も東帰せず」のところに触れ、また、平山画伯の描かれた「大唐西域壁画殿」を拝し、そこに描かれた三蔵法師の艱難辛苦の旅の数々の画面と基調となった東方薬師瑠璃光如来の「ラピスラズリ」の群青に思わず頭が下がりました。ほんとうに素晴らしく思いで多い本山参拝の研修となりました。

（東方薬師瑠璃光如来）

薬師如来の正式な名称は、薬師瑠璃光如来、その働きから「大医王仏」とも言われ、人気のある仏様です。瑠璃とは、宝石の一種のラピスラズリです。深い「群青色」をしていて、「星のきらめき」というたとえがあります。「瑠璃光」とは、美しい青色に輝いていると意味です。瑠璃は、仏様の智慧のたとえともいわれ、私たちに救ってくれるのです。

薬師如来の浄土はこの世界の東方にあり、東方浄瑠璃世界といわれます。阿弥陀如来の浄土が西方極楽浄土であるのと対称的です。浄瑠璃世界も極楽浄土も、どちらもインドの仏教文化の中で生まれてきた信仰です。インドの人々は、このような理想世界をなぜ東西の方向に想像したのでしょうか。

熱帯のインドでは、太陽が真上から照りつけます。自分の影がないような日差しはとても厳しいもので、木陰を見つけて避けないとすぐに熱中症になってしまいます。熱帯の過酷な気候の下での太陽の光は厳しく、日本人が感じているような温和なものではありません。インドでは古来から、太陽が西の大地に沈むか、または、東から上ってくるまでのひとときだけが日光の安らぎを感じさせるものです。つまり、阿弥陀如来の西方極楽浄土は、地平線に沈んでいく夕日のかなたに見た安らかな理想郷であったのでしょし、薬師如来の東方浄瑠璃世界は、夜明け前の白みかけた東の空の、まさにラピスラズリに似た澄み切った青さの中に感じた清らかな仏国土であったことでしょう。



不東と不西の偉人

唐の時代、方や不東の心で西へ、方やいわば不西の心で東へと国禁を犯して、釈迦の教えを求め、広めようと生涯をかけた二人の偉大な僧がいた。玄奘三蔵であり、鑑真和上である。そのお二方が、日本の奈良西の京の近い所でお目にかかれるとは、驚きである。摩訶不思議な縁を感じる。日本の動きとともに、時代を追ってみた。玄奘が亡くなってから 24 年後に鑑真が生まれ、鑑真が生まれてから 60 年後に大仏が建立されている。日本もそんなに遅れてはいなかったのですね。

日本	中国	西暦	玄奘三蔵	鑑真和上	日本の動き		
飛鳥時代 至 708	隋	593			聖徳太子摂政となる 推古天皇三宝興隆の詔		
		600	誕生		遣隋使		
		618					
		622	具足戒を受く		聖徳太子没		
	唐 至 907	627	天竺に向け求法の旅				
		628				推古天皇没	
		630	マガタ国ナランガ寺研究生 活				
		645	長安に帰着 翻訳事業			大化の改新	
		663				白村江の戦い	
		664	遷化 64歳				
		668				天智天皇即位	
		688		揚州にて誕生			
		701		出家			
		708		具足戒を受く		和同開珎を発行	
		710				平城京に遷都	
		724				聖武天皇即位	
		奈良時代 至 794	733				榮叡・普照入唐
			741				国分寺、国分尼寺建立の詔
			742		榮叡・普照 和上訪問受諾		
743			第1次、2次渡航失敗		大仏造立の詔		
744			第3次、4次渡航挫折				
748			第5次失敗 海南島漂着				
749			和上失明		東大寺大仏完成 榮叡遷化 7月 聖武天皇譲位 ⇒孝謙天皇即位		
752					大仏開眼		
753			第6次で薩摩に到着				
754			2月 平城京到着		4月東大寺で440人に受戒		
755					東大寺戒壇院建立		
759			唐招提寺建立				
763			遷化 75歳				